

初期浮世絵における見立絵図像の成立

—奥村政信『絵本江戸絵簾屏風』を手がかりとして—

五味あずさ（広島市立大学大学院）

多色摺り版画である錦絵の誕生以前の江戸において、数多くの古典的な画題を扱い、またそれらの画題を当世風俗で描く見立絵の普及に貢献した浮世絵師として奥村政信（1686~1764）がいる。彼が残した様々な見立ての図像が、後に鈴木春信（1725?~1770）らによって錦絵に用いられていることは既に指摘されているが、それらの図像の種類や成立について、これまで十分に検討されているわけではない。本発表では、特に、奥村政信が制作した『絵本江戸絵簾屏風』（以下、『簾屏風』と記載）という、初期浮世絵の見立て図像が収録されている「絵本」をとりあげ、同書収録の画題の図像の典拠を中世から近世初期のやまと絵や漢画、禅宗絵画、ほかの絵本などの先行作例中に探索し、同書が見立絵成立の過程で果たした役割について考察する。

『簾屏風』全二巻は江戸時代中期、宝暦（1751~63）頃の成立と考えられ、刊行年・地ともに不明である。同書は26の画題が収められた図像集という体裁になっており、その図像は、やまと絵、漢画（狩野派など）、禅画など様々なジャンルから収集され、古典の画題とともに当世風の見立絵も交えて編集されている。ここであえて「図像」という言葉を用いるのは、それが単なる図様ではなく、描かれたかたちが、それぞれ決まった意味を持つものとして人々の間で理解されていたからである。同書中の見立絵で描かれた画題に関しては、琴高仙人など中国の説話をモチーフとした漢画系画題が多く、同画題の作例は室町水墨画にあり、日本の画題としては中世に遡る。こうした図像は、近世初期に刊行された絵本・絵手本類の普及と関わり、『簾屏風』にも取り入れられ、見立絵の図像に変換された可能性がある。見立絵が画題として成立する前提として、制作者と鑑賞者の間にかたちと意味が共有されていなくてはならず、政信らの初期浮世絵において数多くの見立絵が登場した背景に、故事、説話等が古画の図様と併せて人々に普及していた事が窺える。

『簾屏風』収録の画題や図像を確認し、見立絵図像の成立を考察することで、中世からの画題を絵本・絵手本類が取りこみ、また見立絵の図像に変換するという現象において、その図様の取捨選択こそが当時の価値観を反映したものであったと推定できる。奥村政信が制作した『簾屏風』を手がかりに、中世古典絵画のヴィジュアルイメージに遊戯性を与え、江戸文化の華というべき錦絵における見立絵隆盛の前段階を用意した彼の役割を再確認したい。